

## 三密思想について

大塚 伸 夫

身語意の三密は真言密教における成仏論上、重要な概念の一つといわねばならない。そのことは、真言密教の行法が三密を基盤とした瑜伽相応行であり、即身成仏を主張する根拠ともなっているからである。そこで、本稿では是の如く真言密教において重要な位置を占める三密思想の考察を進めていくこととし、その一段階として『大日経』を基礎資料に置いた三密思想の意義について論述したい。

まず初めに、本経における三密を私見ではあるが三つの立場より捉え、これ等を基本概念として、その意義を尋求する事にする。第一は、本経住心品において如来の立場から捉える三密である。所謂、これは本経の教主である大日如来が一切衆生を済度せんとする大悲の発動から神変加持し、自らの身語意活動態を示現するということである。本経ではこれを「三無尽莊嚴藏」と説き、身語意平等性のものと明かしている。つまり、第一の立場は如来三密の示現と捉えるのである。第二は、具縁品以下所説の行の立場において捉える三密

である。これは真言法門によって行する者が曼荼羅の諸尊を本尊とし、手に印契を結び、口に真言を唱誦し、心三摩地に往して本尊と瑜伽相応するといった、真言行を具体的に修習する行為も三密の概念に入っていることなのである。従って、第二の立場は衆生の三密行と捉えるのである。第三は、第一の如来三密の示現と、第二の衆生が行ずる三密行との係わりの中で捉える三密である。このことは悉地出現品、説本尊三昧品、説無相三昧品等所説のものである。その内容は、第一の立場の如来三密が一切衆生を済度する目的で、如来大悲から神変加持して示現された活動相のものといえるから、その活動相が衆生辺へ及び、かつ衆生にとって認識可能な形態へと象徴されなければならず、また象徴化されたものが第二の立場の三密行に組織されているのである。換言せば、如来が無量なる加持身を示現し、その身に如来三密を象徴せしめているのであり、若し仮りに、如来の三密活動が衆生に認識されない無相の状態で、認識可能な状態へと象徴・

転換されない場合、この活動は秘密境界そのままであり、我々衆生はそれを知ることができず、瑜伽相應を目的とした行法も成立し得なくなるであろう。従って、如来三密は理論上、衆生に認識される状態へと象徴化されなければならないのである。そして、その状態へと象徴化されたものが「三無尽莊嚴藏」を標示する曼荼羅であり、そこに見られるのが如来の加持身Ⅱ一切諸仏諸尊で、それ等諸尊に如来三密を具体的に身密Ⅱ印契、語密Ⅱ真言、意密Ⅱ本尊三摩地として標示せしめているのである。また、この標示された三密が今度は真言行法に組織されるのである。要するに、第三の立場は如来三密と衆生三密行との接点であって、三密を無相。有相の両相において捉えることである。

以上がこれより三密の意義について論述を進める基本概念の三点となるが、いずれの立場の三密も結局、空性の理念に立脚した平等性の存在であるといえる。そして、本経が『大毘盧遮那成仏神変加持經』といわれ、経題名に加持(sādhi-sūtra, T: byin gyis rlob pa)の語がある如く、三密は加持の概念と密接に関連しているのである。

次にこれ等の点に留意しながら、善無畏・ブッタグフヤ両注釈者の解釈をみると、善無畏は

為饒益此初入法門实行諸菩薩故。如来加持。奮迅示現大神通力也……宣說一切智門。故先奮迅示現無尽莊嚴藏。所謂莊嚴者。謂

從一平等身。普現一切威儀。如是威儀。無非密印。從一平等語。普現一切音声。如是音声。無非真言。從一平等心。普現一切本尊。如是本尊。無非三昧然此一一三業差別之相。皆無辺際不可度量。故名無尽莊嚴也。……如是毘盧遮那。普於十方一切世界。一皆現仏加持身。

と説いている。この引文は、前半に大日如来が三密無尽莊嚴藏を神変加持して示現するとし、後半ではこの莊嚴藏を示現することは如来が無量な加持身、つまり一切諸仏諸尊を出現させることであると明かして、それ等諸尊に如来平等の三密を印契、真言、三昧として象徴せしめていると説いているのである。更に、善無畏は次の如く説いている。

今此真言門菩薩。若能不虧法則方便修行。乃至於此生中逮見無尽莊嚴加持境界。

この引文は、真言門において行ずる者が前の引文より見た象徴化され、行法に組織化された印契、真言、三昧を以て、本尊を対象とする三密瑜伽行を如法に修習すれば、如来が示現した三密無尽莊嚴なる加持世界へ住することができると明かしているのである。即ち、善無畏の二引文より窺えるのは、三密が如来の加持という働きを俟って初めて成立するということであり、これ抜きでは考えられない概念であるといえる。また、三密が加持の働きと相俟って展開されるから、如来が一切諸仏諸尊という無量な加持身の総合体である三無尽

莊嚴の相を現わし、衆生をその世界へと導く方便が三密瑜伽の行法として説かれているとするのである。

次に、ブッタグフヤの解釈よりみると

de bshin du byin gyis rlob pa shes pañi tshig gis kyan de  
 lhar nam par sprul pa sku gsun thugs mi zad pañi rgyan  
 gyis khamis gsam thams cad du khyab par bstan pa de ni kun  
 du bzan po la sogs pañi byan chub sems dpah yons su dag  
 pa namas kyi spyod yul du gyur gyi / gdul bañi hgro ba  
 hog ma namas kyi spyod yul du ma gyur pas / sku la sogs  
 pa mi zadpañi rgyan de ñid gdul bañi hgro ba de namas kyi  
 don du / rgyud ñid dkyil hñhor dan / snags dan phyag rgyañi  
 sgo nas lus ñag yid kyi mshan mar gyur pa bstan pa ste /  
 byin gyis rlob pa shes pa ni dkyil hñhor dan / snags dan  
 phyag rgyañi sgo nas lus ñag yid gsam gyi cha lugs dan /  
 ran bshin du lñag par bñag ces pañi don to //

と説いており、大日如来が示現した三密無尽莊嚴は衆生の認識可能な境界ではないとし、衆生を済度するために曼荼羅の門と真言・印契の門から加持して、衆生をこの三無尽莊嚴なる加持世界の境界へと導入しようとしていると説いているのである。従ってこの引文によっても同様に、三密には神変加持の概念が必要条件となることが頷けよう。そして、衆生を導く方便として三密瑜伽行の法門が説かれたとい

う趣意も同時に窺えるのである。

それでは是の如くにおいて、『大日經』の三密思想を眺めれば、本經の住心品では如来加持の作用によって三密が無尽莊嚴の相と示現される次第が体系的に説かれており、それに對し住心品より後の具緣品以降では、先に示現された三密が今度は形ある有相のものに標示されて、真言瑜伽行の次第中に攝取せられ、密教独特な行法が詳説されているといえる。

即ち、三密には是の様に大日如来自証の境界を説示するため現わされる如来自らの活動を指す意味と、衆生を悟らしめる目的で組織される実践手段を指す意味とがある。換言せば、如来の悟りの世界から衆生辺へ、かつ衆生辺から悟りの世界へと至る上下の過程が三密という一つ概念に意義づけられているといえる。またこのことからすれば、結局『大日經』は衆生開悟の方便として独自の行法を開示せんがため、このような意義を内在せしめる三密を説き、その修道の目的を明かにしているのではないかと考えるのである。

- 1 『正藏』十八卷、一上。 2 『大日經』所説の主な行には灌頂、五字嚴身觀、四支念誦、種三尊觀等がある。 3 『正藏』十八卷、十九中。 4 同、四四上。 5 同、四四中。 6 「加持」については『成田山弘教研究所紀要』第二号、「Adhishtana（加持）の文獻學的試論」渡辺照宏著参照。 7 『正藏』三九卷、五八三中、下。 8 同、五八四上。 9 北京版『西藏大藏經』Vol. 77, No. 3490, 3b-2-5。